



秋日和

年をとることは悲しいことなのか。人間は年をとって衰えて、また昔の子供のころに帰っていく。

ある秋の日の日曜日、主婦の秋子は不思議な誕生日プレゼントを貰います。それは幼稚園の子供が貰ったら喜ぶような大きな犬のぬいぐるみ。秋子は突然思い出します。

「これは私よ。私が幼稚園の時に父ちゃんから貰った犬のぬいぐるみにそっくり」

そう、それは父親からの誕生日プレゼント。

日常の生活の中に、老人の問題を見つめながら、父親と娘の愛情を描いた戯曲。

「秋日和」

人物

秋子 45歳、主婦
修平 47歳、夫
すみれ 22歳、近所の娘さん
敏江 50歳 義理の姉
幸太郎 80歳 父

1

よく晴れた秋の日曜日。

奈良の斑鳩の里近く静かな住宅地に岡田家がある。舞台は岡田家の茶の間と茶の間から続いている掃出しの庭。茶の間には座卓と小さなテレビが置いてある。庭で夫の修平が自転車の調子をみている。

主婦の秋子が茶の間に入ってくる。

秋子 お父さん、それ、動くようになった？

修平 おかえり。町内会の相談、もう終わったんか。

秋子 うん、今日はね次の大掃除の日取りと分担決めるだけだから。それより、自転車は？。

修平 お父さんが直しといてくれたみたいやで。

秋子 そう言うたら、お父ちゃんが来た時、直してくれてたなあ。

修平 お前がお父さんに頼んだんやろ。

秋子 何も言うてへんよ。何にも言わんでも直してくれてたんよ。

修平 (自転車にまたがって) そやけど、お父さんも年やからな。大丈夫かな。

秋子 大丈夫。お父ちゃん、自転車直すのは名人やもん。

修平 なんか、めちゃくちゃ安物やな。

秋子 何言うてんの、上等なんよ。

修平 お父さんが持ってきたんか。

言いながら自転車でゆっくりと庭から出ていく。

秋子が庭に降りてくる。修平の後ろ姿に。

秋子 それ、山田のおばあちゃんが福引であたった景品なんよ。おばあちゃん、もう自転車なんか乗られへんから言うて、私にくれ

はったん。(一人言で)安物なんて言ったらあかんやろ。

修平(声) 山田のおばあちゃんて、あのド派手で特別元気のええ婆さんかいな。駅の向こうの大きな家の。

秋子 何言うてんの大きな声で、この間特養の老人ホームに行きはったから、あの家にはもう住んだはれへん。

修平(声) 大きな声で町内の若い奥さんなんかガミガミ言うてるて評判やないか。

秋子 (道路に向かつて)そやから、もうおばあちゃんの声は聞かれへんのよ。この間ホームに行きはったから。

修平が自転車で庭に戻ってくる。

修平 何処に行きはったて?。

秋子 ホーム。

修平 何処の駅の?。

秋子 あほ。特養の老人ホーム。

修平 老人ホーム?。何でや、一人暮らしやけど元気なおばあちゃんて言うてたやないか。

秋子 身体はな、元気なんやけど、ちょっと惚けてきてはって、この前ボヤ出しはってん。

修平 ボヤ?

秋子 それで、市の人が世話してホームに入れはったの。

修平が茶の間に上がりポットからお茶を入れたり、タバコを出したりする様子。秋子は庭で自転車の調子をみている。

修平 ボヤ出したから、惚けてきはったとはかぎらへんで。

秋子 普通は、茶瓶でお湯を沸かしてからポットに入れるでしょ。

修平 そら、そや。

秋子 おばあちゃん、ポットにお水をいれてガスにかけはってん。

修平 誰でもあるで、俺なんかばよとしてる時あるからな。

秋子 おばあちゃんなあ、それが普通や思て、ポットが変な煙出して燃えるのをじつと見てはったんやて。隣の人が気がつかんかったら、家もおばあちゃんも丸焼けになるとこ。

驚いて修平が口の中のお茶を噴出してしまふ。

家の中で電話の音。秋子が「電話や」と言って上手に入る。

修平は噴出したお茶を雑巾でふいたり、煙草を吸ったりしている。しばらくして秋子が戻ってきて。

秋子 八尾のお姉さんやわ。お父ちゃんがこつちへ来てないかて。
修平 お父さん？、今日は来てないで。

秋子 朝、散歩に出たまま帰らへんからて、心配してるんやけど。
修平 そやな。お父さんも年やからな。

秋子 年、年、言つたらあかん。今日は天気ええから、きつと遠出して、信貴山あたりブラブラしてるんやわ。

修平 子供は居てへんのかいな。

秋子 え、子供？。

修平 山田のおばあちゃん。

秋子 ああ、おばあちゃん、息子さんと娘さんがいてはるんやけど、二人とも引き取れん言つてはるんよ。

秋子が庭に降りて自転車に乗りながら。

秋子 そやからな。私、おばあちゃんがくれたこの自転車でホームに会いに行こ思てんね。おばあちゃん、この自転車ちゃんと走るよ。おばちゃんも年なんかに負けんと長生きせなあかんよて言うたげよ思て。

修平 どこの老人ホームや。

秋子 奈良山のほう。ドリームランドの近くなんよ。

修平 そら、その自転車で رفتら、往復で半日はかかるな。

秋子 そやけど、どうしてもこの自転車で行きたいねん。

言いながら、秋子が自転車に乗って庭から出て行く。しばらくして「キヤー」と言う声と、自転車が何かにつつかる音。修平が「秋子！」と茶の間から庭に降り、表に飛出していく。しばらくして。

秋子（声）ごめんな。自転車また壊れたかもしれないな。お父ちゃんには黙っててな。気にするかもしれない。そやけど、なんかこうおかしいわ。バランスが悪いというか、壊れかかっているというか、山田のおばあちゃんみたいやけど、そんな悲しい。なあ、お願いやからもういつペン走れるようにして。

修平が自転車を押して庭に入ってくる。秋子が少しビッコをひいてその後ろから歩いてくる。

その時茶の間で煙が上がり始める。修平の吸い差しのタバコの火で、何かが燃え出したのである。

修平 （振り返って）大丈夫か。山田のおばあちゃんのボヤ、笑わ

れへんな。

秋子 (煙に驚いて) あ、お父さん。ボヤ!

修平 おばあちゃんの家やったんやろ。

秋子 (慌てて) 何言つてんの。ボヤはうちやないの!

修平 あ、ほんまや。水!、水!。

慌てて、修平が茶の間に駆け上がる。

暗転。

2

秋子が一人で茶の間で足を揉みながらぼんやり庭の自転車を眺めている。すみれが庭から入ってくる。

すみれ こんにちは。

秋子 あ、すみれちゃん、どないしたん。

すみれ おばさん、さつき、うちのおじいちゃん、町内会の相談に出たでしよう。

秋子 うん、悪かったね、すみれちゃんが出られへんかったら、そう云うてくれたらええんよ。おじいちゃん疲れはったんと違う。

すみれ 私も別に出んでもええて言っただんやけど、おじいちゃん、うちとは班長やから出なあかん言うて。

秋子 それで、どないかしたん。

すみれ 私ね、今帰ってきておじいちゃんに何の話やったのて聞いたら、おじいちゃん憶えてないんです。

秋子 (笑いながら) なんか、日にち忘れてしまいはったん。大掃除、来月の三日の日曜日することに決まったんよ。

すみれ おばさん、うちのおじいちゃん日にちを忘れたんと違うんです。集会で何を話してはったか全部憶えてないんです。

秋子 え、今日は大掃除の日取りとお祭りの報告だけやったから、難しい話なんかなかったんよ。

すみれ (少し涙声になって) おじいちゃん全部忘れてしもてるんです。最近だんだん酷くなって、何でもすぐに忘れてしまうんです。今ご飯食べてたところの、ご飯まだかなんて言うたりして。

秋子

すみれ おじいちゃん、惚けてきたんかなと思って、悲しなって。

秋子 そんな、あんまり気にせんでもええんと違う。おじいちゃん、宅老(在宅老人ホーム注)に来てる時なんか元気ええよ。

そうやこの間ね、俳句の好きなおばあちゃんが来てはって、そのおばあちゃんが「柿食えば 鐘が鳴るなり」までは憶えたはるんやけど、その後が出てけえへんの。一生懸命思い出そうとして、何べんも何べんも「柿食えば」て言いはるねん。それで横に居てたすみれちゃんとこのおじいちゃんが大きな声で、

修平が茶の間に大きな箱を持って出てくる。

修平 「法隆寺や、あんたの頭は壊れてきたんか」って怒鳴りはつたんやろ。

秋子 そう、あんまり大きな声やからみんなびつくりして、おじいちゃんだけすましてはるもんやから、今度は大笑い。

すみれ （笑いながら修平に）こんにちわ。壊れてきたんはうちのおじいちゃんの頭かもしれへんのに。

修平 人間、年取ると少しずつ、そんな風になってくるんや。

秋子 そんなことあらへんよ。ちゃんと話を聞いたげて優しくしたげたら、みんな元気になりはるんよ。

すみれ そうですね。私もそう思ってるんですけどね。

秋子 （修平に）お父さん、その大きな箱、なんやの。

修平 これ、今、宅急便で送ってきたんや。なんか差出人は八尾のお父さんやで。

秋子 （不思議そうに）お父ちゃんから？、何やろな。

秋子が箱の包装をはずし始める。

修平 そうや、お父さんのこと、まだ何も連絡ないな。

すみれ お父さんておばさんとおじいちゃんですか？

秋子 うん、朝から家出て帰ってけえへんねんで。よう、あるのよ。お父ちゃん元気やから一人で何時間も散歩してるの。

すみれ そうですね。おばさんとおじいちゃんは、いつ会ってもほんとにお元気。

修平 （箱の表を見て）何か表に書いてるな。

すみれ 「あきこへプレゼント」て書いてありますよ。おじいちゃんから誰かにプレゼントですね。

修平 あきこ、て誰や。

秋子 そら私でしょう。他に「あきこ」て知ってる？

修平 そら、そやな。お父さんにとっても僕にとっても「あきこ」は一人やろ。

すみれ ということは、これはおじいちゃんからおばさんへのプレゼントですね。（二人に）違います？

秋子が箱を見て考えている様子。そして突然、

秋子 (大きな声で) これ私よ。

修平 あ、びっくりした。何やいきなり。

秋子 これ、私の誕生日プレゼントよ。思い出したわ、小さいころ、お父ちゃんのくれた私の誕生日プレゼントには、いつも「あきこへプレゼント」と書いてあったわ。

修平 誕生日プレゼントで、秋子の誕生日は十一月やろ。

すみれ え、おばさんの誕生日、十一月なんですか。(修平に) 十一月の何日ですか。

修平 だから十一月の。

秋子とすみれが修平の顔を見て。

修平 十一月の。(秋子に) 何日やったかな。

秋子 (少し怒りながら) 十五日。

修平 そうや、十一月の十五日。お父さんも惚けてきたんかいな。

まだ今は十月やのに。娘の生まれた月、忘れたりして。

秋子 どないしたんやろ、私の誕生日忘れたことなんかなかったのに。

修平 おじいちゃんのプレゼントでなんやろ。

秋子と修平が箱をあけて中身を取り出す。箱の中からは犬のぬいぐるみが出てくる。

嘩然として、犬のぬいぐるみを見つめる修平とすみれ。突然、秋子が犬のぬいぐるみを抱いて、

秋子 これ、私の幼稚園の時の誕生日プレゼントやわ。

修平・すみれ 幼稚園？

秋子 そう、あの時にお父ちゃんがくれたぬいぐるみにそっくり。

すみれ おばさんの幼稚園。て、大正時代。

修平 大正時代はオーバーやけど、四十年ほど前やな。

秋子 お父ちゃんは、私がおもてく喜んだのを覚えていたんや。

修平 そういつたら、おとうさん、二年ほど前の誕生日に女学生が使うようなオシャレなバッグくれたことあったな。

すみれ 私、わかるような気がします。もしかしたら、おばさんとこのおじいちゃんには、今のおばさんも幼稚園の時のおばさんも変わらへんのと違います。

秋子 そうよ。そういつこと。

修平 そういうことかいな。

秋子 お父ちゃんの頭の中では、私は毎年誕生日が来るたびに小さい頃の私に戻っていつてるんやわ、きつと。

秋子が抱きしめる犬のぬいぐるみを修平とすみれがみつめるうちに、
・・・溶暗。

3

茶の間に秋子とすみれがいる。二人は机の上で印刷された町内会の会報を整理している。

秋子 すみれちゃん、ごめんね。手伝わして。

すみれ 私も班長やし。そやけど、おばさんの作りはった会報は読みやすいて、みんな言ってますよ。

秋子 ほんま。

すみれ うちのおじちゃんなんか、ワシみたいな年寄りでも読めて喜んでるんです。

秋子 前の人が作つてのが難し過ぎたのよ。男の人やからどうしても会議の記録みたいで。あんな誰も読まれへん。

すみれ そやわ。この間の会報で間違つてるところありましたよ。

秋子 え、

すみれ 私は気がつかへんかったんやけど、近所の人言うてました。

秋子 どこが

すみれ ほら、カラスにご用心というのがあったでしょう。カラスにゴミを荒らされないよう、ゴミはなるべく黒い袋に入れて出して下さいというところ。

秋子 ああ、あれ、テレビでやってたのよ。このへんカラス多いでしょう。でもね、黒の袋なら中身が見えないからカラスが寄り付かないの。

すみれ 黒の袋はだめなんですって。

秋子 え、

すみれ ゴミはなるべく中身が見える袋を使用しましょうって、市からの通達があつたんですって。

秋子 ほんと、知らなかつたわ。

すみれ でも、ゴミを集める人は中身が見えたほうがいいけど、カラスの被害も困りますよ。どっちのほうがいいんでしょう。

秋子 それはカラスでしょ。カラスに決まってるわ。でも市の通達も守らんとあかんし、困ったわね。

その時、奥で電話がなる。修平が奥で電話に出ている様子。しばらくして修平が茶の間に入ってきて秋子に声をかける。

修平 八尾のお兄さんから電話で、やっぱりお父さんうちへ来るんやて。

秋子 うちへ来るってこんなに遅くに。

玄関でチャイムの音がする。

修平・秋子 あ、来たんかいな。

言いながら二人は玄関に出て行く。

すみれだけが茶の間に残って玄関のほうをうかがっている。すると、庭から秋子の父の幸太郎があたりを伺いながら入ってきて、すみれとばったり目を合わせる。

すみれ (驚いて) どなたですか。

幸太郎 (何もいわずニコニコ笑っている)

すみれ あ、おばさんとこのおじいちゃんですか？

幸次郎が笑顔でうなずきながら口に指をあてて、すみれに「シー」と合図を送り、驚いているすみれを残して自転車で庭から出て行く。

しばらくして修平と秋子と、義姉の敏江が戻ってくる。

秋子 (敏江に) ほんとに歩いて、お父ちゃん八尾から歩いてここへ来るの。

敏江 だからお父さんがルス電でそう言ったのよ。

すみれ (秋子に) あ、あばさん。今おじいちゃんが。

敏江 (すみれに) おじいちゃんて？

秋子 近所のおじいちゃん。ちよっと惚けてきてはって、孫のすみれちゃんと一緒に暮らして世話してるの。

敏江 あ、そうなの。大変やね。わかるわ。うちもおじいちゃん居てるもんね。おじいちゃん、大事にしたげて。

すみれ (うつむいて) ええ。

修平 そやけど、お父さんはなんぼ元気ゆうたかて八尾からここまで歩くやて、ちよっと無茶やな。普通の人でも5、6時間はかか

るで。

すみれ おばさん、だから、おじいちゃんが . . .
秋子 すみれちゃん、悪いけどおじいちゃんのこと、後にして。

修平 まあ、心配はないと思うけど、念のために警察に連絡し
たほうがいいか。

敏江 私も、そう思ったんやけど。

秋子 何言うてんの。警察やなんて。お父ちゃんのいつものことや
ん。元気な顔でもう来るんと違う。

敏江 それが、それでもないのよ。

修平 そうでもないって？

敏江 こないだもおかしなことがあったし。

秋子 おかしなこと？

敏江 お父さん、帰る道、分からへんようになったんよ。

修平・秋子・すみれ え、！

敏江 散歩の時、分かれへんようになって、大阪のほうまでどん
どん歩いていってしもて。

秋子 嘘でしょ。それって徘徊やない。

すみれ うちのおじいちゃんもあつたんですよ。警察から連絡があ
つたときは私もうびつくりして。

秋子 そやけど、今日はちゃんとお父さんからルス電が入ってたん
でしょ。

修平 (敏江に) 何て入ってたん。

敏江 「今日は十一月の十五日やから、秋子のところへ行く。歩い
ていくから遅くなる」って。

修平 まあ、遅なることは間違いないな。

すみれ 今日は十月の十五日ですよ。なんで十一月なんですか。

修平 やつぱり、お父さん、秋子の誕生日忘れてしもたんや。今日
が秋子の誕生日と思ってるんやから。

すみれ おばさん、おじいちゃんは誕生日を忘れたんちごうて、
もしかしたら月を勘違いしてるんと違います。

秋子 がはつとして前に出て、

秋子 そうや、お父ちゃんは私の誕生日を忘れたんやない。今日が
十一月の十五日と間違ってるだけなんや。

修平 そやな。そうか、そういうことか。(秋子に) それはええけ
ど、ほんまに八尾から歩いて来れるんかいな。

秋子 きつとくる。お父ちゃんはきつと歩いてくる。自分の家を忘
れても、私のうちは忘れへん。

修平 自分の誕生日は忘れても、娘の誕生日は忘れてないもんな。

秋子 そうよ。私はお父ちゃんの宝やもん。

修平が庭を見て自転車がないことに気がつく。

修平 あれ自転車は、秋子、自転車はどこかへ持っていったんか。

秋子 え、自転車。ほんま、いつの間にか無くなってる。

すみれ あ、自転車はさつき、おばさんとこのおじいちゃんが。

秋子 えー。お父ちゃん、もう来てたん。

言いながら、庭へ出て、外を捜す。

秋子 あ、あれ、お父ちゃんや。

三人も庭を降りて秋子の指さすほうを見る。

敏江 どこ。

秋子 ほらむここの土手の上、自転車に乗って、あ、手を振ってる

修平 ほんまや、あれ、お父さんやがな。

秋子 お父ちゃんは見えるんよ。私達が見えるんよ。

修平 あの自転車、お父さんならちゃんと乗れるんや。(秋子に)

やつぱり、乗り方が悪いんやな。

秋子 (修平をにらんで) 誰かさんも山田のおばあちゃんのボヤを笑われへんしな。

すみれ ボヤがどうかしたんですか。

秋子 ううん。何でもないの。

敏江 なんか、ここから見るといつものお父さんと違うみたい。

秋子 違う。いつものお父ちゃんと違う。お父ちゃんは八尾からこ

こまで歩いてきて自信を取り戻したんよ。

敏江 ほんまに歩いてきたんやな。

秋子 勝ったんよ。だんだん年をとっていくことの不安に勝っ

たんよ。思い通りにならない自分に勝ったんよ。そやからほら、

あんなに嬉しそうやん。

庭から遠くを見ている四人の顔を秋の夕日が照らしている。

(幕)